

## 共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約 400 点におよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996 年度からは、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するプロジェクトに重点的に予算を配分し、重点プロジェクトと位置づけて運営することになりました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。1997 年度には、さらに「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、また 2000 年度からは「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」が組織されました。

さらに 2000 年度からは、研究所の共同利用性を高めるために、専門知識を有する所外の研究者に代表をお願いして運営するプロジェクトを開始しました。現在、「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」が展開されています。

本年度おこなわれるプロジェクトは次のとおりです。

### 重点共同研究プロジェクト

#### 音韻に関する通言語的研究

(主査：梶 茂樹 / 所員 16, 共同研究員 46)

言語学の本来の研究分野は、音韻、形態、統語、意味であるが、そのなかでも音韻論は、長らく他の研究分野をリードしてきた。本研究プロジェクトは、音韻論のなかでも声調(tone)・アクセントを中心とする超分節素(suprasegmentals)の研究をおこなう。

世界に、声調言語は意外と多い。中国語諸方言やチベット・ビルマ系諸語、またベトナム語、タイ語などの東南アジア諸語、バンツ系やクワ系などのニジェール・コンゴ諸語、マサイ語やナンディ語などのナイル系諸語、南部アフリカのコイ・サン諸語、またアフロ・アジア系の中でもチャディック諸語、さらにはニューカレドニア諸語やアメリカ・インディアン諸語など。また、日本語やインド・ヨーロッパ系のスウェーデン語やセルボ・クロアチア語などのピッチ・アクセント諸語の研究も重要である。

具体的な研究テーマとしては、声調、音調、アクセントなどの用語の整理と同時に、次のようなものが考えられる。

- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| (1) 声調 (正確にはピッチ) の音声学的特性 | (5) 声調言語とアクセント言語との違い |
| (2) 子音、母音といった分節素 との関係    | (6) 世界の声調言語のタイポロジー   |
| (3) 個々の言語における声調の体系       | (7) 声調の通時的変化と比較研究    |
| (4) 声調の語彙的、文法的機能         | (8) 声調の発生と消滅         |

|      |       |       |      |      |
|------|-------|-------|------|------|
| 鮎澤孝子 | 池田 巧  | 生駒美喜  | 市田泰弘 | 伊藤英人 |
| 岩田 礼 | 上田広美  | 上野善道  | 遠藤光暁 | 大江孝男 |
| 岡崎正男 | 加藤昌彦  | 角谷征昭  | 上岡弘二 | 神谷俊郎 |
| 木部暢子 | 久保智之  | 窪園晴夫  | 郡 史郎 | 坂本恭章 |
| 品川大輔 | 清水克正  | 杉藤美代子 | 鈴木玲子 | 田中伸一 |
| 壇辻正剛 | 中井幸比古 | 中嶋幹起  | 中西裕樹 | 中野暁雄 |
| 長尾美武 | 長野泰彦  | 新田哲夫  | 早田輝洋 | 原口庄輔 |
| 平山久雄 | 福井 玲  | 堀 博文  | 前田 洋 | 松森晶子 |
| 箕浦信勝 | 藪 司郎  | 湯川恭敏  | 米田信子 | 吉田浩美 |

SMITH, Donna M Erickson

## 一般共同研究プロジェクト

### 東アジアの社会変容と国際環境

(主査：中見立夫 / 所員 3, 共同研究員 33)

近年における国際情勢の変化と学术交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的に実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。本年度は、日露戦争期の東アジア国際関係史に関するシンポジウム、および日本所在朝鮮王朝時代古文書の研究会を行う予定。

|        |      |       |      |      |
|--------|------|-------|------|------|
| 赤嶺 守   | 石井 明 | 石川 禎浩 | 井上 治 | 井村哲郎 |
| 江夏由樹   | 岡 洋樹 | 岡本隆司  | 尾形洋一 | 小野和子 |
| 笠原十九司  | 加藤直人 | 川島 真  | 貴志俊彦 | 岸本美緒 |
| 楠木賢道   | 佐々木揚 | 新免 康  | 菅原 純 | 寺山恭輔 |
| 西村成雄   | 萩原 守 | 浜下武志  | 原 暉之 | 平野 聡 |
| ブレンサイン | 細谷良夫 | 松川 節  | 松重充浩 | 毛里和子 |
| 森川哲雄   | 柳澤 明 | 吉澤誠一郎 |      |      |

### 西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究

(主査：クリスチャン・ダニエルス / 所員 4, 共同研究員 16)

今まで本プロジェクトにおいて、(1)西南中国非漢族の歴史に関する研究発表と(2)史(資)料の発掘・収集・整理 という基本目的に沿って研究を進めてきた。2003年度に完成された《貴州苗族林業契約文書匯編》第三巻史料編・研究編に続き、2004年度において、16世紀から19世紀まで雲南南部の山地解発を重点的に研究する。実地調査によって収集された碑文などの史料の分析を通じて、漢族が山地に移住して生態系を改変した歴史過程を明らかにする予定である。

|      |      |       |       |      |
|------|------|-------|-------|------|
| 井上 徹 | 上田 信 | 菊池秀明  | 岸本美緒  | 末成道男 |
| 武内房司 | 多田狷介 | 谷口房男  | 張 土 陽 | 塚田誠之 |
| 寺田浩明 | 林謙一郎 | 吉澤誠一郎 | 吉野 晃  | 渡辺佳成 |
| 渡部 武 |      |       |       |      |

## インド洋海域世界の発展的研究

(主査：深澤秀夫 / 所員 2, 共同研究員 15)

本プロジェクトにおいては、個別文化・社会の研究の成果を、8世紀頃に成立した<インド洋海域世界>の歴史的展開過程についての通事的研究に導き入れること、またその通事の視点を共時的な個別文化・社会研究に再還流することの可能性を検討する。<インド洋海域世界>についてのこのような双方の視点による考察は、局所的には地域研究に寄与するのみならず、グローバル化する現代世界の中における多元・多文化的な人の在り方に対し、具体的な共存モデルの提示をも招来するものである。

|      |      |      |       |      |
|------|------|------|-------|------|
| 秋道智彌 | 飯田 卓 | 飯田優美 | 川床睦夫  | 崎山 理 |
| 杉本星子 | 高桑史子 | 田中耕司 | 富永智津子 | 花淵馨也 |
| 堀内 孝 | 松浦 章 | 森山 工 | 門田 修  | 家島彦一 |

## 社会空間と変容する宗教

(主査：西井涼子 / 所員 7, 共同研究員 15)

人類学においては個人対社会、主観対客観といった二項対立的な問題設定を前提としていることが多い。この共同研究プロジェクトは、こうした前提を超えて、いかに人々の経験のリアリティを捉えることができるのかについての、人類学的な理論的展望をひらくことを目的とする。ここでいう社会空間とは、主体の実践のスペース、もしくは実践において他者と相互作用しつつ構築する社会関係の総体をさす。そこにおいては、実践主体はいかに重層する諸関係とかかわりながら自己を維持し構成するのが問題となる。そこからあらためて、社会的なものが問われることになる。このような社会科学の中心的ともいえる課題を追求するために、研究会は人類学者を中心としながらも、心理学、社会思想等の隣接分野の研究者の参加をおおぎ、学際的な共同作業による理論の構築をめざす。

|       |       |      |       |      |
|-------|-------|------|-------|------|
| 青木恵理子 | 今村仁司  | 岩谷彩子 | 高木光太郎 | 高崎 恵 |
| 田中雅一  | 田邊繁治  | 田村愛理 | 土佐桂子  | 名和克郎 |
| 西本陽一  | 平井京之介 | 本田 洋 | 箭内 匡  | 矢野秀武 |

## 日本占領期ビルマ(1942-45)に関する総合的歴史研究

(主査：根本 敬 / 所員 2, 共同研究員 8)

本プロジェクトは、日本占領期のビルマ(1942-45年)に関する歴史を、政治・経済・軍事・農業・文化・民衆動向・少数民族・従軍慰安婦の諸角度から実証的な検証を加え、総合的に理解することを目的としている。その際、占領されたビルマ側に重点を置きつつ、占領した日本側の意図と占領政策の実態についても十分に注目するつもりである。

トヨタ財団の計画助成(1年目・2年目・3年目合計1,324万円)を受けながら、ビルマ、英国、米国での資料調査を実施し、また、聞き取りを中心とする国内調査もおこなう。

研究会は聞き取り調査と合わせて実施する予定である。なお、3年計画であるが、委任経理金との関係から4年計画に延長する。4年度目の今年、最終成果報告国際シンポジウムを2004年10月に開催し、さらに成果刊行物出版に向けた準備を具体的に進めていく(一部はすでに進展中)。この他、国内における聞き取り調査も継続する。成果出版は2005年度の予定(英文および和文の論文集、インタビュー記録集、資料集の3種)。

|      |       |       |      |      |
|------|-------|-------|------|------|
| 池田一人 | 伊野憲司  | 岩城高広  | 内山史子 | 高橋昭雄 |
| 武島良成 | 南田みどり | 森川万智子 |      |      |

## 修辞学の情報学的再考

(主査：小田淳一 / 所員 6, 共同研究員 18)

古典修辞学の諸部門の中で 19 世紀まで存続したのは「表現法(elocutio)」のみであるが、20 世紀半ばから始まった修辞学の復権は表現法を、テキストを構成する諸要素間の範列的及び連辞的關係におけるコード変換の技法として、実体的な要素単位に対して直接作用する操作であると見なすに至っている。

本プロジェクトは言語表現、音楽表現、映像表現、身体表現等の作り手、またそれらの表現を分析している研究者を共同研究員及び研究協力者に加え、芸術の美的価値をある構造の関数として記述するという、一元的な芸術 = 形式論に基づく「形式的構造の研究」としての一般修辞学を情報学的に考察することによって、様々な形式を持つ言語文化情報に偏在する修辞学的技法のレパートリーを明らかにすることを目的とする。

2004 年度は、今までの研究会で報告された、諸々のテキスト（音楽、映像を含む）における修辞学の関与可能性から、実践的かつ汎用的な修辞計算モデルの構築をめざす。

|       |       |       |      |      |
|-------|-------|-------|------|------|
| 青柳悦子  | 石井 満  | 宇佐美隆憲 | 内海 彰 | 小方 孝 |
| 金井明人  | 上村龍太郎 | 佐藤みどり | 往住彰文 | 永崎研宣 |
| 永野光浩  | 難波雅紀  | 西尾哲夫  | 平井 寛 | 堀内正樹 |
| 松本みどり | 水野信男  | 良峯徳和  |      |      |

## 間大西洋アフリカ系諸社会における 20 世紀<個体形成>の比較研究

(主査：真島一郎 / 所員 4, 共同研究員 32)

21 世紀転換期の人文社会系諸学でこれまでに発現をみてきたさまざまな思潮の底流にあるのは、西欧近代の市民原理に裏打ちされ相互に交錯しつつ成立した三様のレベルにおける歴史主体 - <国家><民族><個人> - のありようを複数の視角から根本的に問いなおしていく、主体の問いなおし作業にほかならなかった。

本プロジェクトがめざすのは、このうち国家や民族の“揺らぎ”とは対照的に主体としての権利づけが複数性のうちでつねに代補・更新されつつ、非西洋世界における記憶、声、身体、ジェンダー、あるいはクレオール、ディアスポラ、サバルタン、マイノリティ、市民（市民社会、世界市民...）といった数々の言説空間の中で中核を占めてきた第三の主体概念<個人>の位置づけについて、20 世紀・間大西洋アフリカ系諸社会における特定の個人々の生の深みにまでさかのぼった具体の場からこれを問いなおし、比較検討していく作業である。アフリカ大陸・島嶼部の諸社会、カリブ・中南米のアフロ系諸社会、およびアメリカ合州国のアフリカ系コミュニティを対象とする人類学、歴史学、政治学、文学など多分野の研究者から構成された共同研究によりその際とくに焦点が当てられるのは、自己による自己の生を通じた表象形成と、他者による他者の情報を介した表象形成との交叉点で成立する、<個体化 = 個体形成 individualization>の歴史・文化的動態となるだろう。

2005 年度の成果公表にむけ、最終年度にあたる来年度に論集執筆の準備会合を数回ひらき、論文の単なる寄せ集めではない、共同研究の完成形態としての論集刊行をめざす。

|       |      |      |       |       |
|-------|------|------|-------|-------|
| 阿部小涼  | 荒井芳廣 | 岩田晋典 | 梅屋 潔  | 遠藤 貢  |
| 大辻千恵子 | 大森一輝 | 落合雄彦 | 北川勝彦  | 工藤多香子 |
| 栗本英世  | 小池郁子 | 崎山政毅 | 佐久間寛  | 佐々木孝弘 |
| 佐藤 章  | 柴田佳子 | 鈴木 茂 | 鈴木慎一郎 | 砂野幸稔  |
| 武内進一  | 竹中興慈 | 中條 献 | 津田みわ  | 中林伸浩  |
| 浜 邦彦  | 樋口映美 | 星守守之 | 松田素二  | 溝辺泰雄  |
| 矢澤達宏  | 渡辺公三 |      |       |       |

## 文法記述の方法の研究

(主査：中山俊秀 / 所員 2, 共同研究員 7)

個別言語の文法構造の記述は、良くも悪くも「客観的事実の前理論的列記」と考えられることがある。そのために、記述に携わるものも、またその記述を形式理論構築に活用するものも、当の記述の理論的含みに対して無反省、無批判であることが多い。しかし実際には、「記述」という作業は高度に理論的な考察、決断の積み重ねであり、そうしてまとめられた文法は理論的に中立な事実の羅列ではありえない。とすれば、対象言語の本質を真に捉えた記述というものは、記述の枠組み、分析の単位、用いられる基本概念などを注意深く検討、規定する過程を通らさずには達成しえない。そこで、このプロジェクトでは、文法記述に携わっている研究者が集まり、文法記述に際してさまざまなレベルでなされなければならない理論的考察および決断の数々を意識的に見据え、検討していく。

なお、このプロジェクトでは、できるだけ問題を深く掘り下げ、実際の記述に即した議論、検討を進めるため、少人数での集中研究会の形式をとる。

阿部優子  
笹原 健

蝦名大助  
月田尚美

加藤昌彦

笹間史子

江畑冬生

## Studies on African Languages

(主査：松下周二 / 所員 3, 共同研究員 18)

本プロジェクトは、アフリカ大陸を、サハラ以北・以南、東アフリカ・西アフリカ等のように分断することなくとらえ、種々の語族、国家、民族とかかわるアフリカの諸言語を、広い視野から分析・考察していくことを目的としている。

現地調査に基づく、地道ながらもオリジナルな研究を主流としつつ、文献・資料に基づく緻密な考察をも加え、さまざまな歴史・文化の交錯するアフリカの言語の実情を、多彩な研究者の間で共有し、明らかにしていきたい。

具体的な活動計画：

- 1) 年間3乃至4回の研究会を開き、2～3名による口頭発表およびそれに基づく討論を行なう。
- 2) 研究会では、自由発表のほか、その回のテーマを設定し、共同研究員や研究協力者に、個別の言語のデータを提示してもらい、それらをもとにディスカッションを行なうという形式も考えている。
- 3) 研究会の成果は、発表者による、AA 研 Journal 等への投稿を要請する等、紙媒体での公表はもちろんのこと、本プロジェクトのウェブサイトを整備し、すみやかにウェブ上で公開していく。
- 4) 本プロジェクトのウェブサイトでは、研究会で口頭発表されたものでなくとも、アフリカの言語研究に関する論文や書評等を積極的に受理・公開する。
- 5) その他、共同研究員等から寄せられた、アフリカ言語学やそれに関連する学会等の情報を、ウェブサイトにおいて告知していく。
- 6) ウェブサイトと並行して、メーリング・リストによる迅速な情報交換を行なう。
- 7) ときには、在日アフリカ人等を交えた懇親の場を設け、広い意味での異文化交流も図っていきたいと考えている。

安部麻矢  
佐藤道雄  
中野暁雄  
若狭基道

阿部優子  
塩田勝彦  
中村博一

神谷俊郎  
砂野幸稔  
日野舜也

小森淳子  
竹村景子  
宮本律子

榮谷温子  
柘植洋一  
米田信子

Philips, John E.      Ratcliffe, Robert R.

## 土地・自然資源をめぐる認識・実践・表象過程

(主査：河合香史 / 所員 6, 共同研究員 9)

本研究プロジェクトは、アジア・アフリカの諸社会において土地や自然資源をめぐる現在進行しつつある状況を、利用や所有にかんする形態や制度論にとどまることなく、さまざまな生活の文脈において生起する人びとの具体的な実践から、その生活世界を統合的に把握することによって解析するものである。

土地は、名づけられ、語られ、歴史を付与されたものであるとともに、生活実践の場として、そこに身をおき、身体をもって働きかける、あるいは見、聞き、ふれることによって身体において「知る」対象であるといった意味において、身体性とも深くかかわる。こうした土地、およびこれに付随する自然資源は、外在的な認識の対象にとどまらず、人びとにとって「生きられる世界の全体」としてあつかいうる。このような視点を採用することによって、土地や自然資源をめぐる認識・実践・表象という問題系を、実用主義と主知主義、実体論と象徴論の二項対立的な図式をこえて、身体、記憶、歴史、他者といった要素を取りこみながら「生」の全体を包括した文化・社会理論を構築するための方法論と解析手法として提示することが可能となる。

本プロジェクトでは、土地・自然資源の利用や領有の実態、および認識と表象過程についておのの社会のおかれた状況をふまえて比較検討する。さらに、土地や自然資源をめぐる人びとの多彩な実践を、具体的な「生」の現場としての土地をめぐる自然観・環境認識の問題系としてあつかい、民族の歴史や集団間関係、国家政策との関係をもふくめた「生」の現場から再考察することを目指す。

プロジェクト最終年度となる3年目は、1、2年目の討論・成果をふまえ、本プロジェクトの目的である言語文化と自然ないし生態とを結びつけうる統合的な議論の場の開拓に向け、新たな視点と方法論を具体的に提示してゆきたい。

梅崎昌裕  
杉山祐子

北村光二  
津村宏臣

衣笠聡史  
寺嶋秀明

小松かおり  
吉村郊子

椎野若菜

## 言語基礎論の構築

(主査：峰岸真琴 / 所員 4, 共同研究員 7)

現代の言語理論は西欧諸語の研究に深く根ざしたものを中心に展開されてきた。西欧語型の言語理論の枠組みが多くの非ヨーロッパ的言語の理論的考察に広く適用されていく中で、言語構造のタイプの違いからくる分析上の問題点は多く指摘されてきたが、これまでには、結局、従来理論の完成度の問題として対処され、西欧語型理論が基礎をおく前提概念、カテゴリーに対して具体的な反省が及ぶことはなかった。また、記述言語学者の側も、個々の言語記述において、そのような伝統的前提概念やカテゴリーを、十分に反省を加えることなく、基本的枠組みとして踏襲することが決して少なくなく、その結果、それぞれの言語の特徴に即した記述であるべきものが、はからずも「西欧語から見た記述」になってしまっていることも多い。

本プロジェクトでは、従来の言語理論、言語記述のあり方を問い直し、言語研究の新しい展開のための基盤を作ることを目的とする。そのために、現行および過去の言語理論について、その基礎概念、カテゴリーを再検討し、通言語的視野に立った枠組みの可能性を検討する。

加藤重広  
粕山洋介

佐久間淳一  
吉田一彦

沈 力

藤原加奈江

町田 健

## 社会文化動態の比較研究 北部南アジアの動きから

(主査：石井 溥 / 所員 1, 共同研究員 23)

人類学において比較研究は不可欠であるが、それを方法として確立することは大変に難しい。これは静態の比較についてすでに言われているが、動態の比較はさらに大きな問題である。しかし揺れ動く世界の中にある社会文化を把握しようとする場合、動態の比較は、分析の視点として大いに重要である。

ここでは、北部南アジア [ インド(南部4州以外)、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン ] を主な対象地域とし、その諸側面の変化を捉え、相互の比較を行いつつ分析を深める。北部南アジアは英植民地権力の影響が直接的であった地域と間接的であった地域を含み、宗教的にも多様で、また、近年、経済自由化、「民主化」、あるいは独特の国民形成などの多様な国家レベルの変化を経験している。

本共同研究では、このような地域における社会文化変化の分析とその比較をとおして、人類学研究における比較方法の洗練を目指す。

|      |       |                      |      |      |
|------|-------|----------------------|------|------|
| 今井史子 | 上杉妙子  | 鹿野勝彦                 | 小牧幸代 | 佐藤齊華 |
| 橘 健一 | 田辺明生  | 外川昌彦                 | 中谷純江 | 中谷哲弥 |
| 名和克郎 | 幅崎麻紀子 | 三尾 稔                 | 南真木人 | 宮本万里 |
| 森本 泉 | 八木祐子  | 安野早己                 | 山上亜紀 | 山本真弓 |
| 山本勇次 | 渡辺和之  | Maharjan, Keshav Lal |      |      |

## 無文字社会における「むかし」を知るには？ 無文字社会の過去を知るための研究

### とその手法開発

(主査：加賀谷良平 / 所員 5, 共同研究員 22)

2003年度は、「むかし」に関するこれまでの様々な研究方法のその成果を考察してきた。16年度は、(1)「もの」に関する技術の開発 / 伝播や、持続してきた文化・社会での前後関係、相互関係からの「むかし」を検討したい。さらに、(2)各研究分野からの成果である出来事史等を、分野を超えて相互的補完をし、(3)その地域、その時期での空間・時間認識について考察したい。

|      |      |       |       |       |
|------|------|-------|-------|-------|
| 飯田 卓 | 池谷和信 | 井関和代  | 上田富士子 | 神谷俊郎  |
| 亀井哲也 | 慶田勝彦 | 佐々木重洋 | 佐藤 俊  | 竹沢尚一郎 |
| 鳥山 寛 | 中野暁雄 | 西田正規  | 日野舜也  | 藤井麻湖  |
| 堀 信行 | 丸尾 稔 | 三木 亘  | 森口恒一  | 吉田憲司  |
| 米田信子 | 和田正平 |       |       |       |

## イスラーム写本・文書資料の総合的研究

(主査：羽田亨一 / 所員 3, 共同研究員 20)

イスラーム世界で著され、記された歴史的文化的遺産である写本・文書資料の総合的研究を目的としている。アラビア語、ペルシア語、オスマン・チャガタイ両トルコ語の写本・文書が主な対象となる。

写本、文書の利用は今日の学界ではあたりまえのこととなっているが、写本・文書資料利用のための方法論については十分な議論が尽くされないまま、進んでいるのが現状である。そこで、現在、日本の各地で行われている写本研究・文書研究をネットワーク化し、写本学、古文書学を踏まえた研究会を積み重ね、相互の知見を交換する。

また、少人数からなる作業グループを編成し、写本・文書資料の校訂、翻訳を推進する。成果は可能な限り、研究所の出版物として刊行する。

|      |      |       |       |      |
|------|------|-------|-------|------|
| 赤坂恒明 | 磯貝健一 | 江川ひかり | 大河原知樹 | 大稔哲也 |
| 小野 浩 | 久保一之 | 後藤敦子  | 清水和裕  | 高松洋一 |
| 林佳世子 | 真下裕之 | 間野英二  | 守川知子  | 森本一夫 |
| 家島彦一 | 矢島洋一 | 山口昭彦  | 川本正知  | 中町信孝 |

## 中国系移民の土着化 / クレオール化 / 華人化についての人類学的研究

(主査：三尾裕子 / 所員 2, 共同研究員 16)

本研究では、海外中国人（本研究では、地政学的な「中国」の外に移住した中国系の人々を指す用語として用いる）を対象に、海外中国人を同質的、単一的に表象する従来の人文・社会科学の諸研究に共通した分析視点を批判的に再検討し、新たな海外中国人像（華人 / チャイニーズ・クレオール等）や「民族」概念を再構築することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

- (1) 従来の諸研究において代表的な海外中国人として表象されてきた、ホスト社会の中で経済的・文化的ヘゲモニーを掌握した都市在住の「華人（所謂現地国籍を取得した中国人意識を持った人々）」だけではなく、マイノリティ、あるいは周縁的存在となり、現地化が進んだチャイニーズ・クレオール等を含む多様な海外中国人の社会文化の実態、そしてそれらの人々のアイデンティティ形成過程と現状。
- (2) ホスト社会と海外中国人社会との相互作用及びそれによって生まれるアイデンティティの多様性（土着化 / クレオール化 / 華人化）とその文化的特質の関係性。また、海外中国人社会との接触によるホスト社会の変容。
- (3) ホスト社会と海外中国人との相互作用、国民国家化、ローカル / グローバルの関係性から生じる、海外中国人が関わる民族カテゴリーとそのエスニック・ポリティックスの実態の把握。及びこれらから再構築される民族カテゴリーを事例として、文化人類学における民族論、クレオール概念について行う再考と新たな「民族」概念の提示。

|      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| 赤嶺 淳 | 板垣明美 | 市川 哲 | 甲斐勝二 | 桑山敬己 |
| 貞好康志 | 未成道雄 | 菅谷成子 | 芹澤知広 | 田村和彦 |
| 田村克己 | 中西裕二 | 信田敏宏 | 舩谷 鋭 | 宮下克也 |
| 宮原 暁 |      |      |      |      |

## 日本語組版研究

(主査：芝野耕司 / 所員 1, 共同研究員 8)

1980年代にワープロが普及するにつれて、当時のワープロが実現していた基本的な禁則処理を含むいわば原稿用紙レベルでの組版が普及の兆しを見せ、活版印刷時代の高度な日本語組版は危機に瀕していた。

この問題に対応するため、JIS X 4051 日本語文書の行組版方法を1993年に制定し、1995年及び2004年に改正した。また、2000年にはJIS X 4052 日本語文書の組版指定交換形式を制定した。

欧米での組版は、シカゴ大学の Chicago Manual of Style やオックスフォード大学の Style Manual など、組版とともに、正書法も含めたスタイルマニュアルが確立しているが、日本語に関しては、このようなものは存在しない。

こうしたことから、組版規則だけでなく、正書法も含めた日本語スタイルマニュアルを検討することが必要である。

居郷英司  
田原恭二

枝本順三郎  
野村保恵

小野沢賢三  
平松慎司

小林 敏

逆井克巳

## 「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究

(主査：永原陽子 / 所員 1, 共同研究員 18)

近年の世界で奴隷貿易・植民地支配に対する謝罪や補償を求める動きが盛んになっていることを受け、「植民地責任」概念の成立にいたる旧植民地住民の歴史意識・歴史認識の変化に注目して、アジア・アフリカにおける脱植民地化過程を再検討する。狭義の「脱植民地化」の時期のみでなく、それに至る前史（ラテン・アメリカ諸国の独立、第一次世界大戦後の植民地体制の再編）や、最近の歴史意識の変化の中で生まれてきた「帝国」的結合の性格の変化にも目を向ける。

アフリカ、アジア、ラテン・アメリカの地域史の研究者とヨーロッパ帝国史の研究者との共同研究とし、年3回程度の研究会を行う。

浅田進史  
杉山優子  
浜 忠雄  
吉田 信

飯島みどり  
鈴木 茂  
平野千果子  
渡辺和仁

尾立要子  
高林敏之  
前川一郎  
船田クラーセンさやか

柴田暖子  
旦 祐介  
溝辺泰雄

清水正義  
中野 聡  
吉國恒雄

## ドイモイの歴史的考察

(主査：栗原浩英 / 所員 2 共同研究員 6)

1986年にベトナムで開始されたドイモイ(刷新)政策はベトナムの党・国家の諸政策(政治・経済・軍事・外交・文化等)社会、国民の価値観のあり方に大きな変化をもたらしたが、すでに20年近くが経過しその成果と問題点も明らかになりつつあり、ドイモイを総括すべき時期がきている。

本プロジェクトはより長期の歴史過程の中にドイモイを位置づけることによってドイモイを総括することを目的としている。それは同時に、今やベトナムでも忘却の彼方へと追いやられてしまった集団主義時代(レ・ズアン時代、1957年~86年)を逆照射する試みでもある。

本プロジェクトは総括的なアプローチをとらずに以下の点に分析を集中し、ドイモイの本質的な部分と副次的な部分とを峻別して考察を進める。

- (1) ドイモイの起源
- (2) ドイモイをもたらした主要な動因とドイモイによる副産物
- (3) 1970年代末~80年代初頭(レ・ズアン時代末期)の諸改革とドイモイの関連性
- (4) ドイモイにおける社会主義的要素の比重(特に国営企業の役割)
- (5) 周辺諸国(中国・ラオス)の改革政策との比較、相互作用

石井 明  
古田元夫

加藤弘之

白石昌也

鈴木基義

竹内郁雄

## 東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」

(主査：黒木英充 / 所員 3, 共同研究員 16)

東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバリゼーションのプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動(Human Mobility)」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状況に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

臼杵 陽  
佐原徹哉  
間 寧  
家島彦一

粕谷 元  
澤江史子  
堀井 優

北澤義之  
土佐弘幸  
松井真子

栗田禎子  
長沢栄治  
村田奈々子

佐藤幸男  
中村妙子  
森晋太郎